

相模原市 御中

道保川公園の実証試験報告書

目次

1.	はじめに	1
1.1	PFAS の定義と指針値	1
1.2	本実証試験の経緯	1
1.3	事業の実施主体と役割分担	1
2.	道保川公園における現地実証試験	2
2.1	実証試験の目的・目標	2
2.2	実施場所	2
2.3	実施時期・期間	3
2.4	技術および処理原理	3
2.4.1	処理技術一覧	4
2.4.2	イオン交換樹脂による除去原理	4
2.4.3	粉末活性炭による除去原理	4
2.5	処理装置の概要	5
2.5.1	処理フロー	5
2.5.2	処理技術 A	5
2.5.3	処理技術 B	6
2.5.4	処理技術 C	6
2.6	処理装置の設置	7
2.6.1	電気工事および分電盤（全技術共用）	8
2.6.2	貯水タンク（全技術共用）	9
2.6.3	技術 A（イオン交換樹脂）	9
2.6.4	技術 B（イオン交換樹脂）	10
2.6.5	技術 C（活性炭）	10
2.7	評価の方法	11
3.	現地実証試験の結果	12
3.1	PFOS および PFOA の除去	12
3.2	PFHxS および PFBS の除去	13
3.3	処理前後の pH	14
3.4	せせらぎの沢の PFOS 等濃度低減効果	15
3.5	メンテナンスの結果	16
4.	吸着剤のライフの概算	17
5.	撤去と復旧	20
5.1	処理装置の撤去	20
5.2	復旧作業	21

6.	本試験の成果	22
----	--------------	----

1. はじめに

本書は、道保川公園（〒252-0243 神奈川県相模原市中央区上溝 1359）（以下、公園）で実施している PFOS・PFOA の浄化実証試験（市公共施設における有機フッ素（PFAS）対策技術実証事業計画（以下、事業計画））のうち現地実証試験の結果報告書である。なお、室内試験の結果については、2026 年度まで継続するため、試験終了後に別途報告する。

1.1 PFAS の定義と指針値

有機フッ素化合物（PFAS）は、2021 年に経済協力開発機構（OECD）で公表された定義に則り、少なくとも 1 つの完全にフッ素化されたメチル又はメチレン基（フッ素が結合している炭素原子に H、Cl、Br、I 原子が結合していないもの）を含むフッ素化物質と定義する。PFAS にはスルホ基を有するペルフルオロアルキルスルホン酸（PFSA）とカルボキシル基を有するペルフルオロアルキルカルボン酸（PFCA）があり、代表的な物質として、PFOS（ペルフルオロオクタンスルホン酸）、PFOA（ペルフルオロオクタン酸）があげられる。PFOS および PFOA は、2020 年に人の健康の保護に関する要監視項目に追加され、指針値（暫定）として 50 ng/L 以下（PFOA および PFOS の合算値）が制定され、2026 年 3 月時点では指針値（PFOS・PFOA 合算値で 50 ng/L 以下）となっている。PFHxS（ペルフルオロヘキサンスルホン酸）は人の健康の保護に関する要調査項目に追加され、環境指針値は未設定である。本試験の報告書では、PFOS、PFOA、PFHxS、PFBS の 4 物質を取り扱い、これらを合わせて PFOS 等と表記する。

1.2 本実証試験の経緯

2021 年度より相模原市では地下水および河川水の PFOS・PFOA に関する調査が行われており、本実証試験の対象地である道保川公園では最大 340 ng/L の PFOS 等が検出された。

また、2024 年 8 月に相模原市と株式会社奥村組が「木材利活用や環境保全等に関する包括連携協定」を締結しており、この協定に基づく取組みの一環として PFOS 等の浄化実証試験を実施した。

1.3 事業の実施主体と役割分担

本実証試験では、奥村組と相模原市（環境保全課、公園課）を実施主体とした。奥村組の役割として、公園内の定められた場所において環境水中の PFOS 等の浄化実証試験を実施すること（試験に関わる費用を負担）、相模原市（環境保全課、公園課）の役割としては、公園での実証試験フィールドの提供、指定管理者との調整である。

2. 道保川公園における現地実証試験

道保川公園において PFOS 等対策技術を用いた処理装置を設置し、実証試験を行った。

2.1 実証試験の目的・目標

公共施設における取り組みを公表することによる市民の安心感の醸成、環境対策の推進に向けた PFOS 等除去技術に関する知識の蓄積、法令等の整備を見据えた知識の蓄積を目的とし、株式会社奥村組が提供できる PFOS 等処理技術の適用性を確認した。本試験の目標は、「処理装置を通過する環境水中の PFOA、PFOS の合算値を 50 ng/L 未満まで低減させること」とした。

2.2 実施場所

本試験は道保川公園（相模原市中央区上溝 1 3 5 9 番地）内せせらぎの沢周辺で行った（図 2-1）。実施場所は事前の水質調査の結果、処理装置を設置するスペースがあること、公園内に生息するホタルやホトケドジョウに影響しないこと、安定的な原水量を確保できることから選定した。

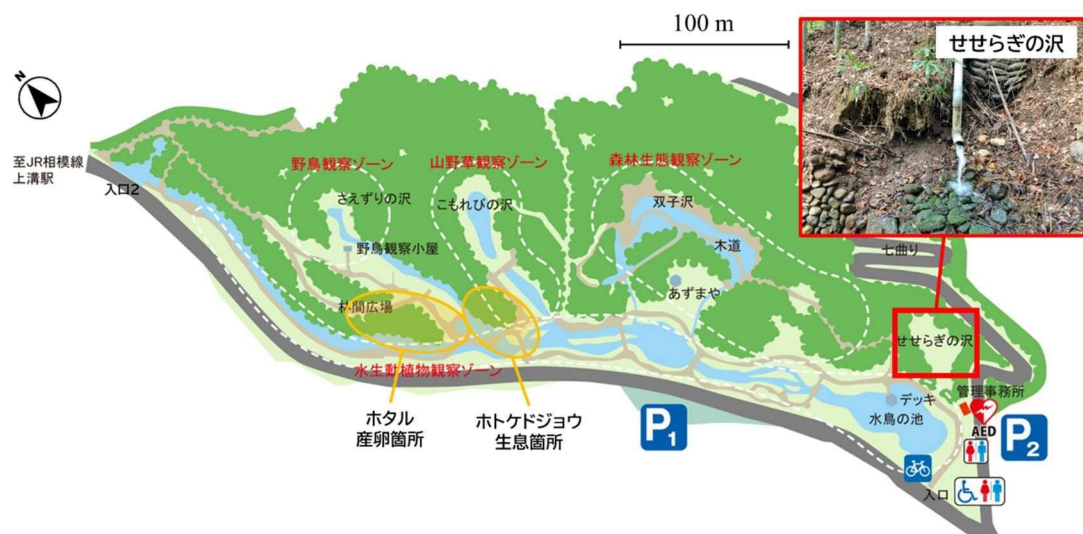


図 2-1 本試験の実施場所（せせらぎの沢）の詳細

2.3 実施時期・期間

2025 年 11 月 4 日（火）～2026 年 1 月 28 日（水）、86 日間実施した。

2.4 技術および処理原理

2.4.1 処理技術一覧

表 2－1 に実施した処理技術の概要を示す。本試験では、下記の 3 種の技術を用いた。

表 2－1 実証試験で実施した技術および処理条件

	技術 A	技術 B	技術 C
技術	イオン交換樹脂※1	イオン交換樹脂※2	活性炭※3
使用量	50 L	50 L×2 本	666 g
処理量※4	1 m ³ /h	1 m ³ /h×2 本	0.2 m ³ /h
必要面積	約 1 m ²	約 1.5 m ²	約 5 m ²
協力会社	日本海水	室町ケミカル	流機エンジニアリング

※1：イオン交換樹脂はピュロライト社製の「PFA694E」

※2：イオン交換樹脂は室町ケミカルが提供するラインナップの「Muromac WMT-718B」

※3：流機エンジニアリングの活性炭はプリーツフィルター（2 m²）に添着させて実施

※4：せせらぎの沢の原水量が約 5 m³/h であることから、3 社の処理量を調整した。

本試験の技術はイオン交換樹脂と活性炭である。表 2－2 にそれぞれ技術のメリット、デメリットを示す。

表 2－2 イオン交換樹脂および活性炭のメリット・デメリット

	イオン交換樹脂	活性炭
メリット	・ PFAS 除去容量が大きい ・ 短鎖 PFAS に対しては活性炭より除去できる場合がある ・ 再生すれば繰り返し使用できる	・ 実績が非常に多い ・ 長鎖 PFAS 除去に強い ・ 吸着媒体単価が低い
デメリット	・ 活性炭と比較して吸着媒体単価が高い ・ 水質によって除去性能が変化 ・ 樹脂の再生が技術的に難しい ・ 使用済み樹脂の最終処分が不可欠	・ 活性炭の交換回数が増えるとコスト・運搬・処分負担が増大 ・ 水質によって除去性能が変化 ・ 対象水との長い接触時間が必要 ・ 再生が技術的に難しい ・ 使用済み活性炭の最終処分が不可欠

2.4.2 イオン交換樹脂による除去原理

イオン交換樹脂による PFAS 除去の原理は、以下に示す 2 つの基本原理によって PFAS をイオン交換樹脂中に留め、PFAS が系外に排出されるのを防ぐ（図 2－2）。

- ①樹脂を構成する化合物の水酸基（OH 基）と PFAS のカルボキシル基あるいはスルホ基によるイオン交換反応によるイオン吸着
- ②樹脂を構成する化合物の非極性部分と PFAS の疎水性部分が相互作用により引き合う疎水性結合

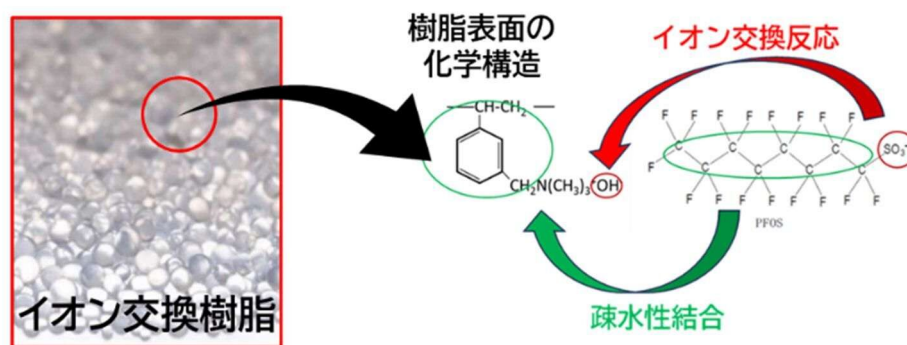


図 2－2 イオン交換樹脂による PFAS 除去の原理

2.4.3 粉末活性炭による除去原理

活性炭への吸着除去の原理は、多孔質構造である活性炭の細孔に PFAS が取り込まれる（吸着：疎水性結合）ことで系外に排出されるのを防ぐ（図 2－3）。

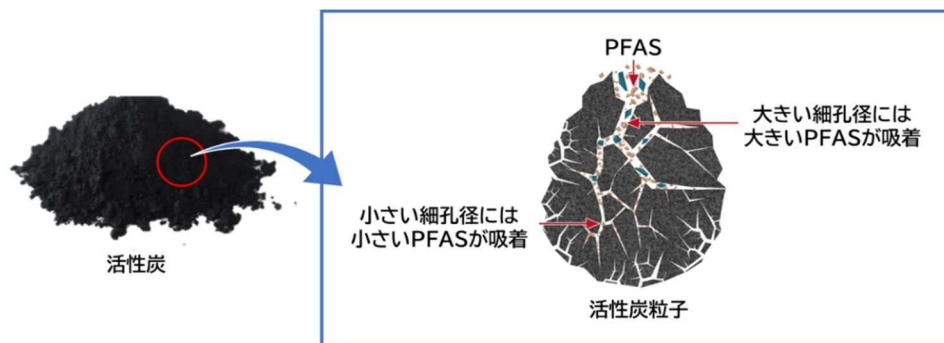


図 2－3 活性炭による PFAS 除去の原理

2.5 処理装置の概要

2.5.1 処理フロー

処理フローは、提案書のとおり、貯水タンクに3技術それぞれポンプを設置し原水を各社装置へ送った。基本は、「貯水タンク」、「前置フィルター」、「処理装置」、「放流」としたが、技術Bは「処理装置」の後に「後置フィルター」、技術Cは「前置フィルター」と「処理装置」の間に「原水タンク」を設けた（図2-4）。「後置フィルター」はイオン交換樹脂の流出防止のため、「原水タンク」は粉末活性炭を水に懸濁させてプリーツフィルターに添着させる工程のため設けた。

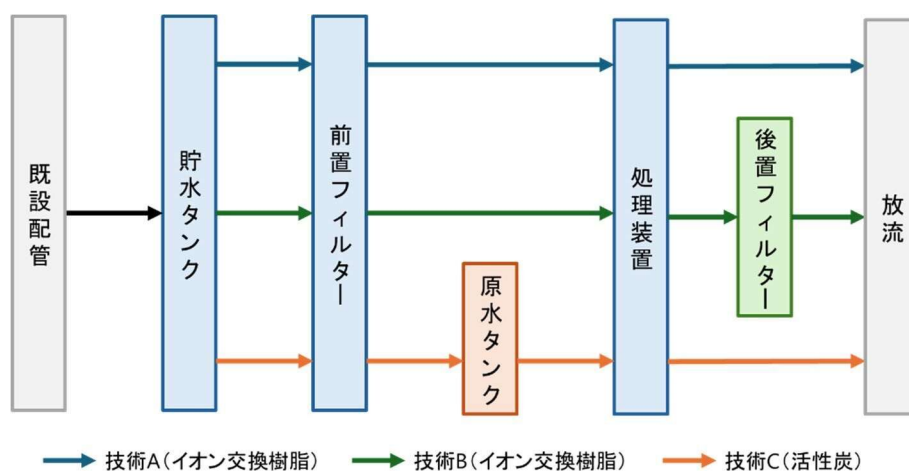


図2-4 各社の処理フロー概要

2.5.2 技術A

技術Aはイオン交換樹脂による吸着除去である。図2-5に技術Aの装置概略図を示す。貯水タンクからポンプで前置フィルターに原水を送る。この時、流量調整弁を設け一部の原水が貯水タンクに戻るようにした。前置フィルターを通過した原水はイオン交換樹脂が充填された50Lボンベ（樹脂塔）に通水されPFOS等が除去される。

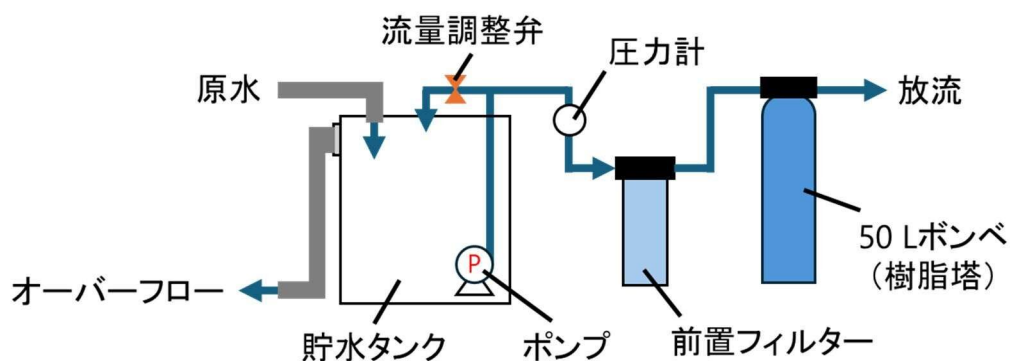


図2-5 技術Aの装置概略図

2.5.3 技術 B

技術 B も技術 A と同様にイオン交換樹脂による吸着除去技術である。図 2－6 に技術 B の装置概略図を示す。貯水タンクに設置したポンプにより 2 本の前置フィルターを並列で通水させた。前置フィルターの前後に圧力計を設け、前置フィルターを通過した原水は、並列で 50 L ボンベ（樹脂塔）2 本それぞれに通水され PFOS 等が除去される。

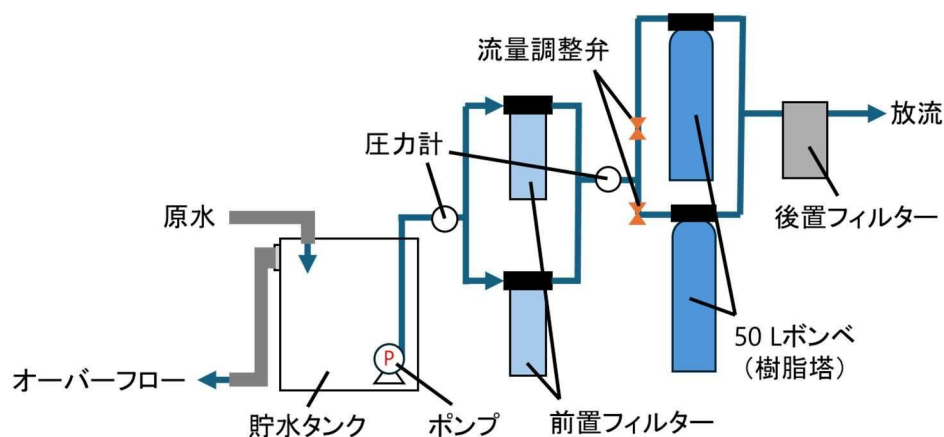


図 2－6 技術 B の装置概略図

2.5.4 技術 C

図 2－7 に技術 C の概略図を示す。技術 C はプリーツフィルター（LFP）に粉末活性炭を添着させ、対象水をろ過することで粉末活性炭に PFOS 等を吸着させる除去技術である。試験開始前に原水タンク内で水に粉末活性炭を懸濁させ、プリーツフィルターへ懸濁水を流すことで粉末活性炭をプリーツフィルターに添着させる。貯水タンク中の原水をポンプにて前置フィルターに送り、原水タンクを通り粉末活性炭が吸着されたプリーツフィルター（活性炭塔）を通過し PFOS 等が除去される。

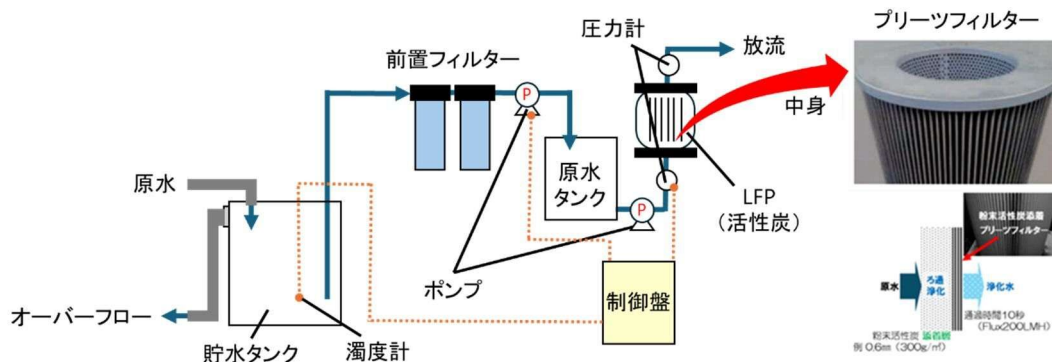


図 2－7 技術 C の装置概略図

2.6 処理装置の設置

処理装置はせせらぎの沢が流れる河川敷のスペースに設置した（図2－8）。表2－3に実証試験の準備工程概要を示す。

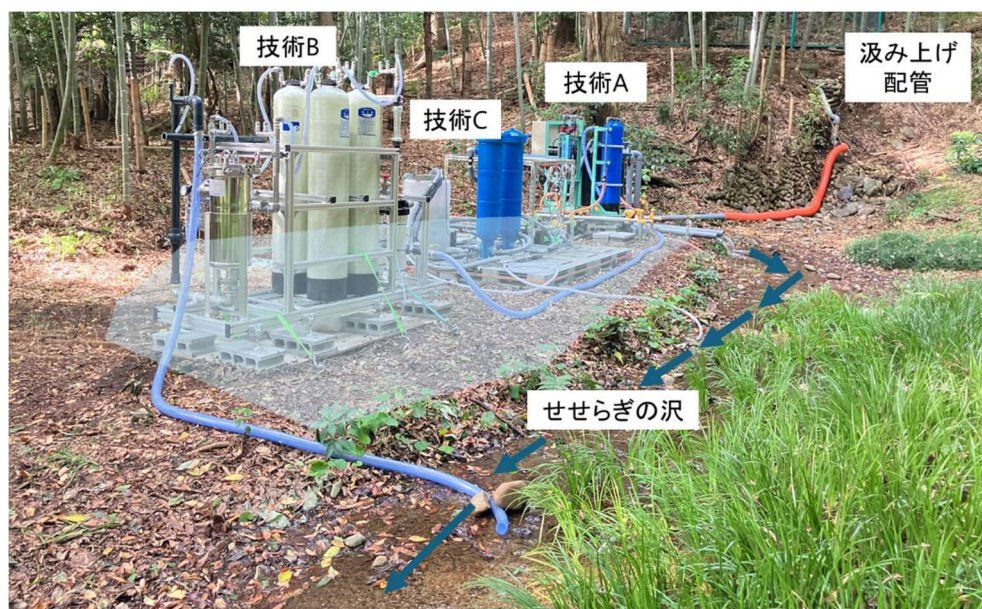


図2－8 処理装置の設置状況

表2－3 実証試験における現地の準備工程概要

日にち	作業内容
10月15日（水）	電気関連工事
10月20日（月）	処理装置設置（技術A：イオン交換樹脂）
10月21日（火）	試運転（技術A：イオン交換樹脂）
10月27日（月）	処理装置設置（技術C：活性炭）
10月28日（火）	試運転（技術C：活性炭）
10月29日（水）	処理装置設置（技術B：イオン交換樹脂）
10月30日（木）	試運転（技術B：イオン交換樹脂）

2.6.1 電気工事および分電盤（全技術共用）

実証試験で使用した電気は、既設の電源ユニットから供給した。既設電源の遮断機の端子台に結線した電気配線は、電源ユニットボックスの側面を一部開口した箇所から、フレキシブルホースを通して本試験用の分電盤まで引いた。この際、雨水浸入対策として、ゴムパッキンとボックスを設置した（図2-9）。分電盤は3技術共用とした。



図2-9 既設電源ユニットの開口と配線

本試験の電気供給が原因でせせらぎの沢の既設ポンプが停止しないよう、下記の二重対策を行った。

- ①3社の装置それぞれにサーマルスイッチを設置し、3社個別で電流が超過した場合、各社でブレーカーが落ちるよう設定した。
- ②3社合流後の電流が7.0 Aを超過した場合、サーキットプロテクタが作動し、分電盤の主電源が落ちるよう設定した。

2.6.2 貯水タンク（全技術共用）

貯水タンク（500 L）は3 技術共用とした。既設の汲み上げ配管をホース等で延長させ、自然流下で貯水タンクへ送った（図 2－1 0）。貯水タンクは上部にオーバーフロー用に開口し、処理量を原水量より少なくすることで常にオーバーフローする状態とした。



図 2－1 0 既設配管の延長および貯水タンク設置状況

2.6.3 技術 A（イオン交換樹脂）

図 2－1 1 に技術 A（イオン交換樹脂）の設置状況および転倒防止対策を示す。単管パイプを打ち込み、打ち込んだ単管パイプに単管パイプを水平方向に結合し、単管パイプをパレット内に通し固定化した。なお、貯水タンクも同様の方法で設置し、貯水タンクと技術 A を一体化させた。パレットと地面との隙間はコンクリートブロックを入れ沈下防止を図った。

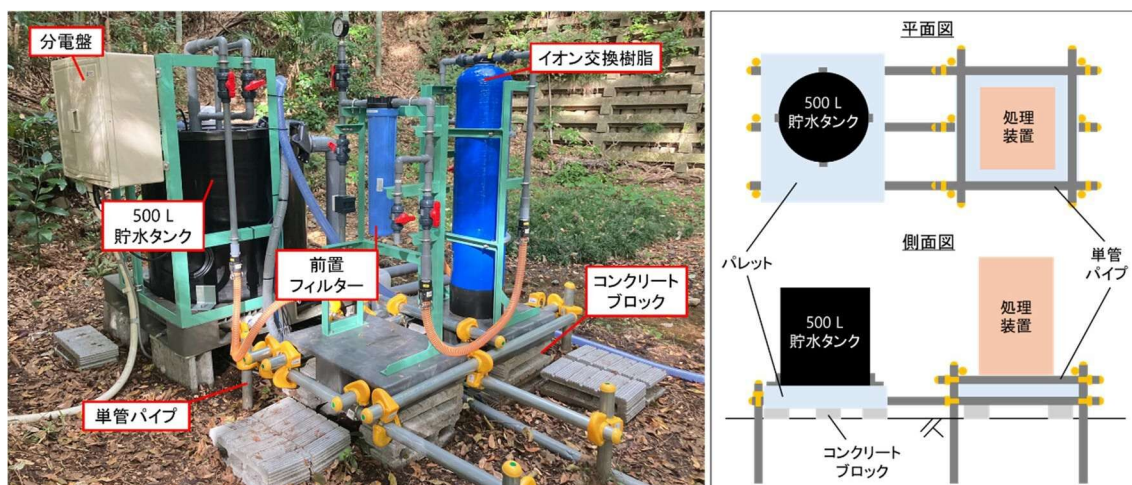


図 2－1 1 処理装置（技術 A）の設置状況および転倒防止対策

2.6.4 技術 B（イオン交換樹脂）

技術 B（イオン交換樹脂）は、コンクリートブロック上に処理装置を設置し、60 cm のペグとロープで装置を固縛した（図 2－1 2）。

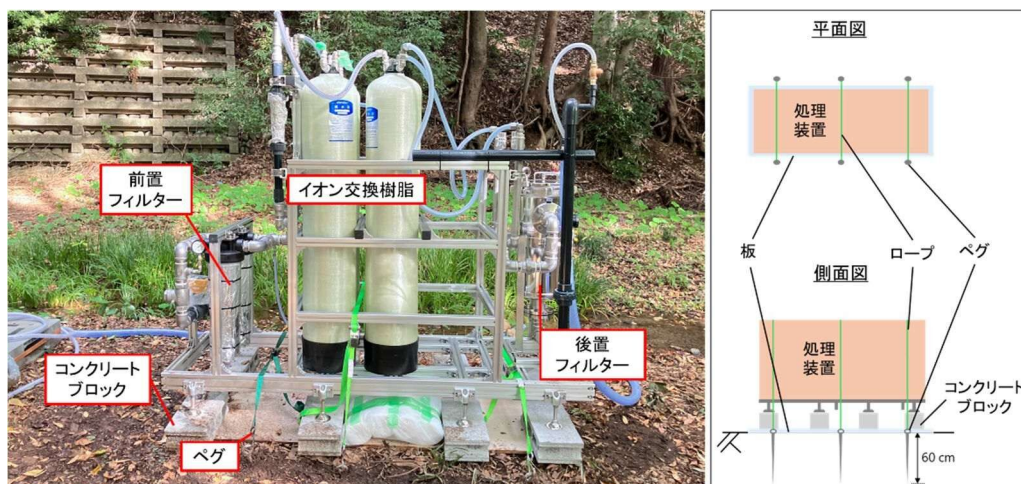


図 2－1 2 処理装置（技術 B）の設置状況および転倒防止対策

2.6.5 技術 C（活性炭）

技術 C（活性炭）は、水平にパレットを設置し、装置はパレットに結束し、30 cm のペグを打ち込みパレットで地面と一体化させた（図 2－1 3）。

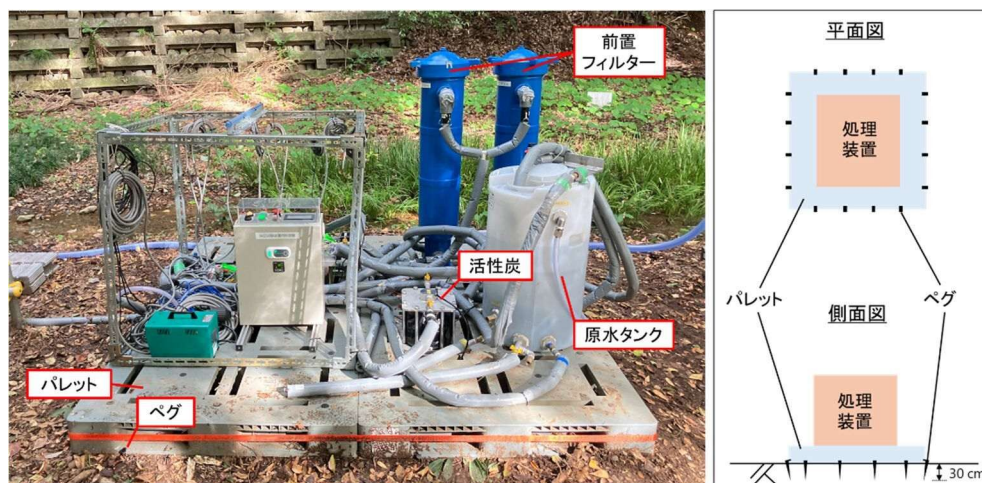


図 2－1 3 処理装置（技術 C）の設置状況および転倒防止対策

2.7 評価の方法

処理効果を確認するために、約1回/週の頻度で各処理装置（イオン交換樹脂充填ポンベ、活性炭充填装置）の入口で原水を、出口で処理水をサンプリングし、サンプル中のPFOS、PFOA、PFHxS、PFBS濃度を分析した。

せせらぎの沢の一部におけるPFOS等除去が沢全体および公園内全体のPFOS等濃度に及ぼす影響を確認するため、2026年1月19日および23日は、図2-14に示す水鳥の池の最下流部でサンプリングした。サンプルは上記と同様にPFOS、PFOA、PFHxS、PFBS濃度を求めた。

分析方法として、「令和2年5月28日環境省通知環水大水発第2005281号表1 固相抽出-LC/MS/MS法」により測定した。

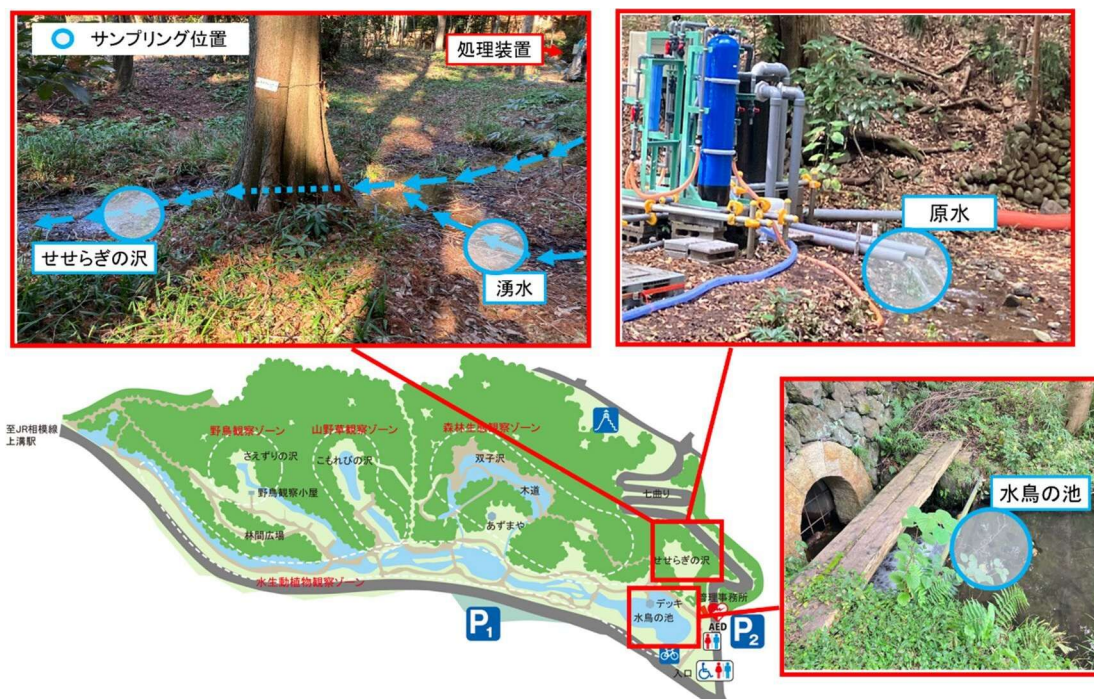


図2-14 2026年1月19日および23日のサンプリング位置

3. 現地実証試験の結果

3.1 PFOS および PFOA の除去

図3-1に本試験における各技術のPFOS、PFOA濃度の推移を示す。いずれの技術においても試験期間を通じて本試験の目標である処理後のPFOS+PFOA濃度50 ng/L以下を達成した。技術AおよびBにおいて、処理後のPFOS+PFOA濃度は試験期間を通じて定量下限値である2 ng/Lを示した。技術Cの処理後のPFOS+PFOA濃度は定量下限値を超過し、最大で21 ng/Lを示した。

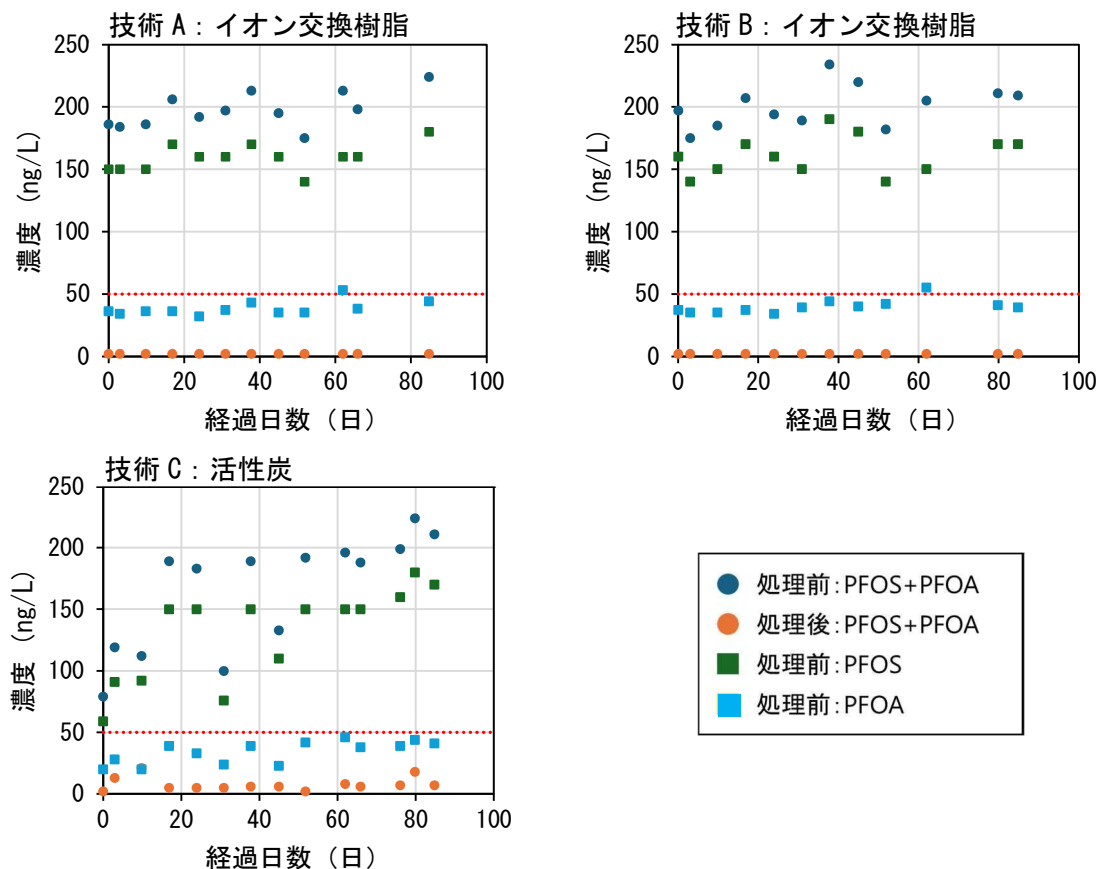


図3-1 PFOS、PFOA濃度の推移

(技術A：イオン交換樹脂、技術B：イオン交換樹脂、技術C：活性炭)

原水中のPFOS+PFOA濃度は、試験期間を通じてPFOSが約75%、PFOAが約25%であった。技術Aおよび技術Bのイオン交換樹脂による処理では、原水中のPFOS+PFOA濃度は約180~230 ng/Lで推移し、試験期間中の原水濃度の変化傾向は認められなかった。技術Cの原水中のPFOS+PFOA濃度は技術A・Bとは異なり、最も低い濃度で約79 ng/Lを示し、試験開始直後は濃度が低く、17日目まで上昇傾向にあり(31日目：100 ng/L、45日目：133 ng/L)、約50日目以降で安定して推移した。

3.2 PFBS および PFHxS の除去

図3-2に本試験における各技術のPFBS、PFHxS濃度の推移を示す。いずれの技術においても試験期間を通じて、処理後のPFBS、PFHxS濃度は、原水濃度より低く、2 ng/L（定量下限値）～6 ng/Lで推移した。環境水中のPFBS、PFHxSに対する除去効果もあることが確認できた。

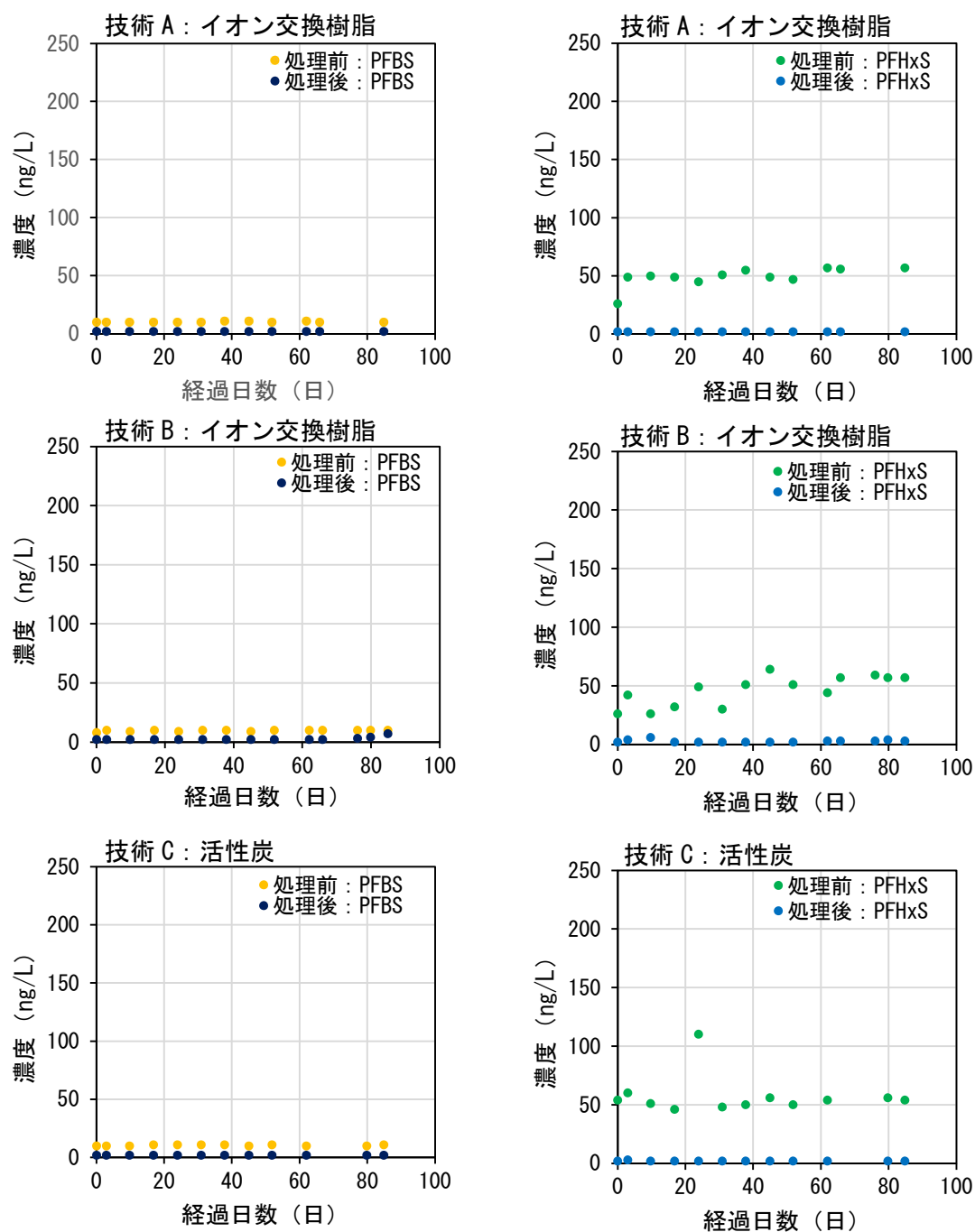


図3-2 PFBS、PFHxS 濃度の推移

(技術 A: イオン交換樹脂、技術 B: イオン交換樹脂、技術 C: 活性炭)

3.3 処理前後の pH

本試験では、公園および河川の水質に悪影響を及ぼさない技術を採用した。図 3-3 に本試験による処理前後のせせらぎの沢の pH を示す。いずれの技術においても処理前の pH は約 7~7.5 であった。処理後の pH は試験期間を通じてほとんど変化がないことを確認した。

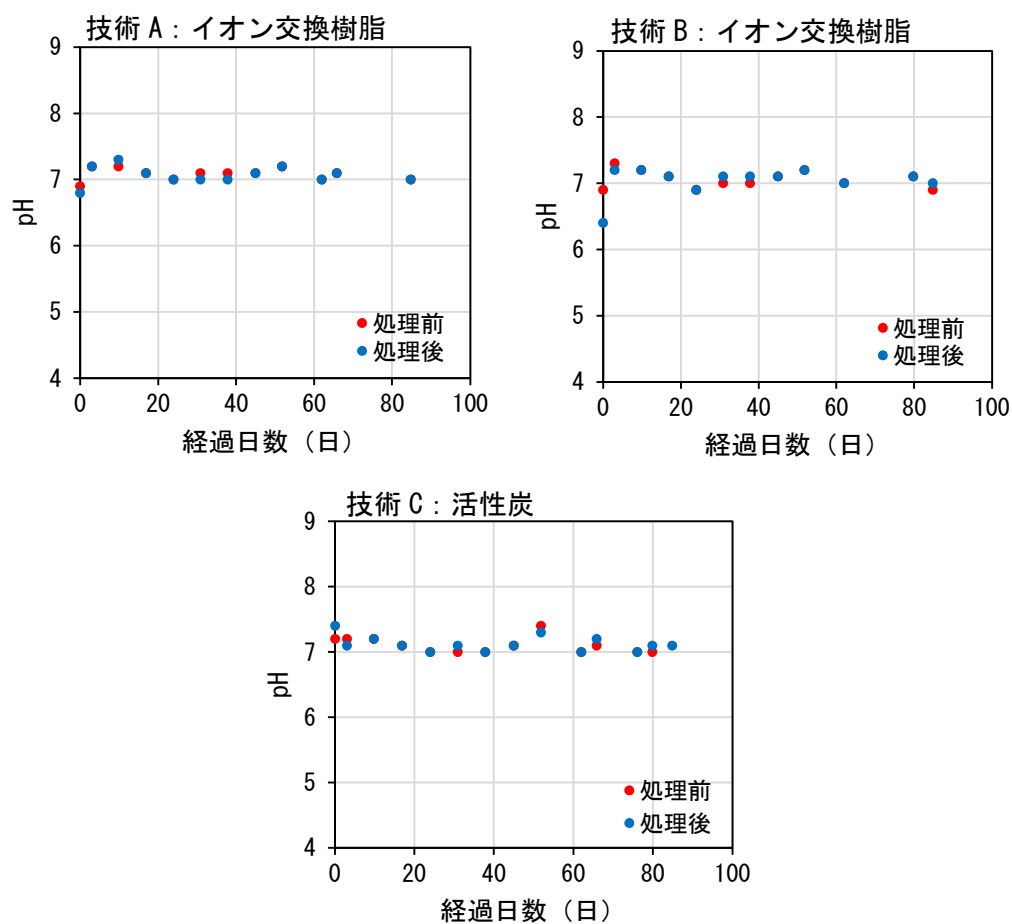


図 3-3 処理前後の pH 推移
(技術 A : イオン交換樹脂、技術 B : イオン交換樹脂、技術 C : 活性炭)

3.4 せせらぎの沢の PFOS 等濃度低減効果

2026 年 1 月 19 日、23 日の試験結果より、せせらぎの沢（図 2－14）の PFOS+PFOA 濃度は原水濃度に対し、それぞれ 50%、63%の濃度低減が確認された（図 3－4）。湧水中にも原水と同程度の PFOS 等濃度が含まれていたが、湧水量はせせらぎの沢の水量に対して小さいため、せせらぎの沢の PFOS+PFOA 濃度低減効果があったと考えられる。公園内の最下流部である水鳥の池では、PFOS+PFOA 濃度は原水と同程度であった。公園内全体の流量に対してせせらぎの沢の流量が非常に小さいため公園内全体の PFOS+PFOA 濃度低減は確認されなかったと考えられる。

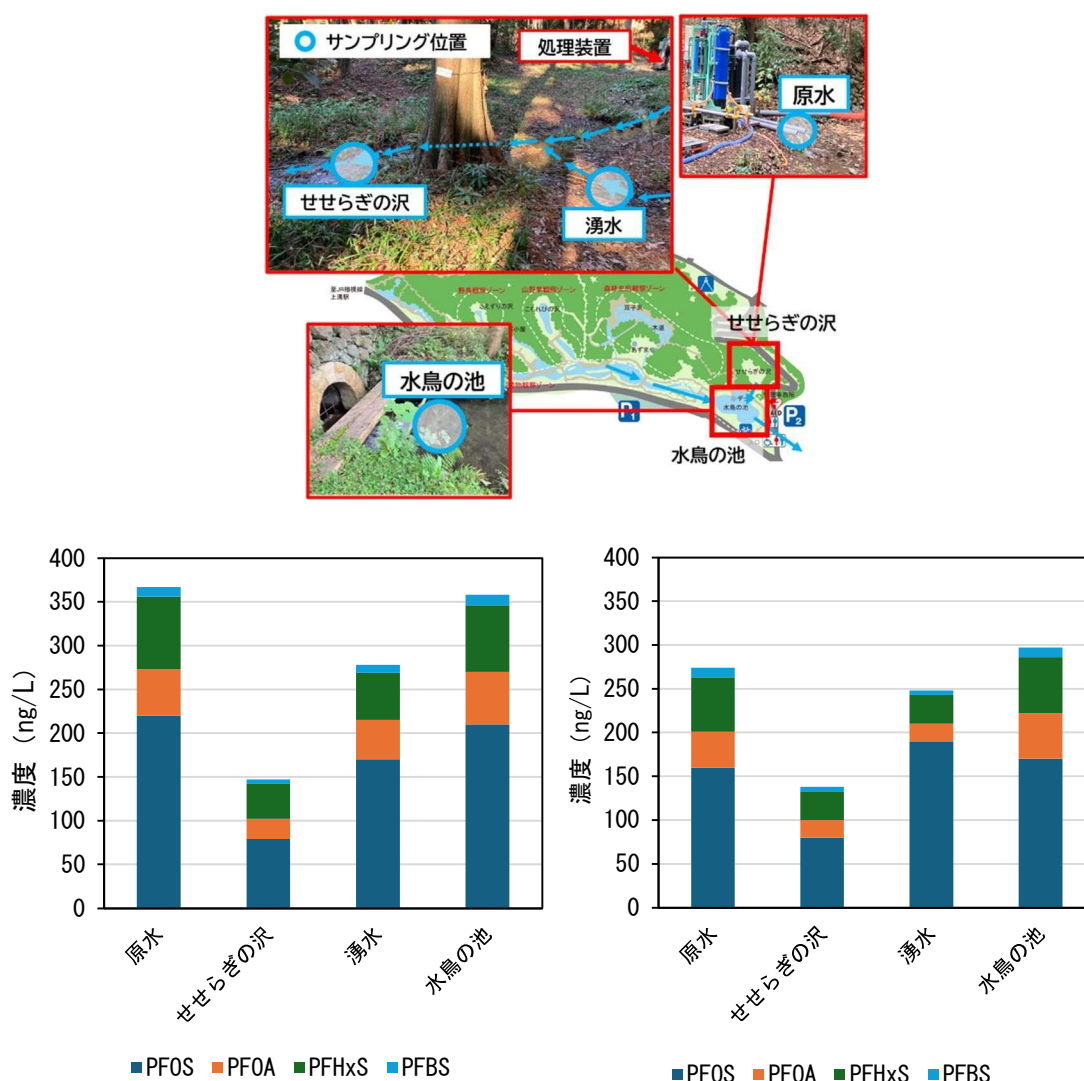


図 3－4 サンプルング箇所を変えた 1/19、1/23 の試験結果（左：1/19、右：1/23）

3.5 メンテナンスの結果

サンプリング時のメンテナンスにおいて、事業計画どおりの流速で処理できていることを確認した（技術 A : $1 \text{ m}^3/\text{h}$ 、技術 B : $1 \text{ m}^3/\text{h} \times 2$ 、技術 C : $0.2 \text{ m}^3/\text{h}$ ）。また、圧力は技術 A を除いて試験期間を通じてほとんど変化が無く、前置フィルターの汚れや目詰まりもほとんど無いことを確認した。技術 A は、1 月 28 日時点で圧力が 0.033 MPa に上がっていたため（試験開始直後 : 0.017 MPa ）、前置フィルターの目視確認および撤去作業までの閉塞防止のため前置フィルター（ $10 \mu\text{m}$ ）の交換を行った（図 3－5）。試験では、サンプリングに合わせて約 1 回/週の頻度でメンテナンスを行ったが、処理装置が安定的に運転できていることを確認できれば、本試験の処理条件の場合 3 ヶ月に 1 度程度のメンテナンス頻度で十分と考えられる。



図 3－5 前置フィルター交換状況

4. 吸着剤のライフの概算

表 4－1 に吸着剤のライフ算出のための条件を示す。本試験では、処理後の PFOS 等濃度の上昇傾向が認められず、破過を確認できなかったことから、試験結果から吸着剤のライフの算出はできなかった。技術 C の吸着剤のライフは試験結果における処理水中の PFOS+PFOA 濃度の傾向より算出した。表 4－2 に各技術の吸着剤ライフをまとめた。

表 4－1 吸着剤ライフ算出時の条件

	技術 A	技術 B	技術 C
技術種別	イオン交換樹脂	イオン交換樹脂	活性炭※ ¹
使用量	50 L	50 L	666 g
処理量	1 m ³ /h	1 m ³ /h×2 本	0.2 m ³ /h
空間流速 (SV) ※ ²	20/h	20/h	100/h
計算方法	設定条件より算出	設定条件より算出	試験結果から算出
PFOS 等濃度	PFOS: 170 ng/L、PFOA: 43 ng/L PFHxS: 55 ng/L、PFBS: 10 ng/L		—
原水の水質	pH：中性、有機物や浮遊物質はほとんど含まれない		せせらぎの沢
PFAS 吸着容量	—	240 mg/L-R	124 µg/g

※¹：かさ密度 0.33 g/cm³

※²：空間流速 (SV) (h⁻¹)：単位時間当たりの流量÷ベッド体積（充填した塔の体積（空隙含む））

※³：詳細はメーカーより非公開

表 4－2 吸着剤のライフ

	技術 A	技術 B	技術 C
技術	イオン交換樹脂	イオン交換樹脂	活性炭
処理可能量	387,000 BV※	788,400 BV※	225,000 BV※
処理可能日数※	806 日間	1798 日間	93 日間
※BV：通水倍率（吸着剤量に対する流量倍数） BV=SV×通水時間=（処理水量/吸着剤体積） ※安全率未考慮。協力会社により推奨安全率は異なり、技術 A: 0～0.85、技術 B: 0.5			

(ア) 技術 A：イオン交換樹脂

具体的な計算過程はメーカー非公開のため不明であり、表 4－1 の条件下での想定ライフである。表 4－3 記載のライフは、処理水の濃度が所定濃度（PFOS：25 ng/L、PFOA：5 ng/L）に達した時点で交換するライフとしている。PFOA は PFOS より樹脂に吸着しにくいことから所定濃度が低く設定されており、運転可能日数が短くなっている。なお、算出されたライフについては安全率が考慮されておらず、安全率の設定値は要相談となる。協力会社（日本海水）は安全率 0～0.85 を推奨している。

表 4－3 イオン交換樹脂のライフ

	処理可能量	運転可能日数
PFOS	470,000 BV	979 日間
PFOA	387,000 BV	806 日間

※BV：通水倍率。樹脂量に対し通水する流量倍数。BV=SV×通液時間

(イ) 技術 B：イオン交換樹脂

ライフの算出は、吸着容量（240 mg/L-R：樹脂 1 L あたりの吸着量）から算出した。PFOS 等濃度は 278 ng/L（170+43+55+10 ng/L）とし、1 m³/h の処理量であれば、約 1798 日のライフとなる。なお、算出されたライフについては安全率が考慮されておらず、協力会社（室町ケミカル）は安全率 0.5 を推奨している。

(ウ) 技術 C：活性炭

本試験の結果から算出した活性炭のライフを表 4－4 に示す。処理可能量は 225,000 BV、運転可能日数は 93 日と算出された。

表 4－4 粉末活性炭のライフ

	処理可能量	運転可能日数
PFOS+PFOA	225,000 BV	93 日間

※BV（処理水量/吸着剤体積（本報では、かさ密度を 0.33 g/cm³ に設定））

以下に計算過程を示す。図 4－1 に PFOS+PFOA を 200 ng/L として計算した、BV と PFOS+PFOA の処理後濃度/処理前濃度との関係を示す。合算値が 50 ng/L に達する点を破過点（処理後濃度/処理前濃度=0.25）とした。本試験で使用した粉末活性炭の PFOS 等の吸着容量は 124 µg/g（124,000 ng/g）であり、粉末活性炭の使用量 666 g、PFOS 等濃度 200 ng/L より、処理可能量は 210,000 L と想定されたが、210,000 L を超過しても PFOS 等が除去されていた。そのため、ほとんど粉末活性炭のライフが残っていないと推察した。図 4－1 の最

も高い BV2 点のプロットを結んで直線を引き、この直線と処理後濃度/処理前濃度=0.25 の直線の交点を破過点（処理可能量）とし、そのときの BV は 225,000 であった。処理速度は 0.2 m³/h のため、1 日あたり 4,800 L、すなわち 2,400BV を処理できることから、運転可能日数は 93 日（225,000÷2,400）と推察された。

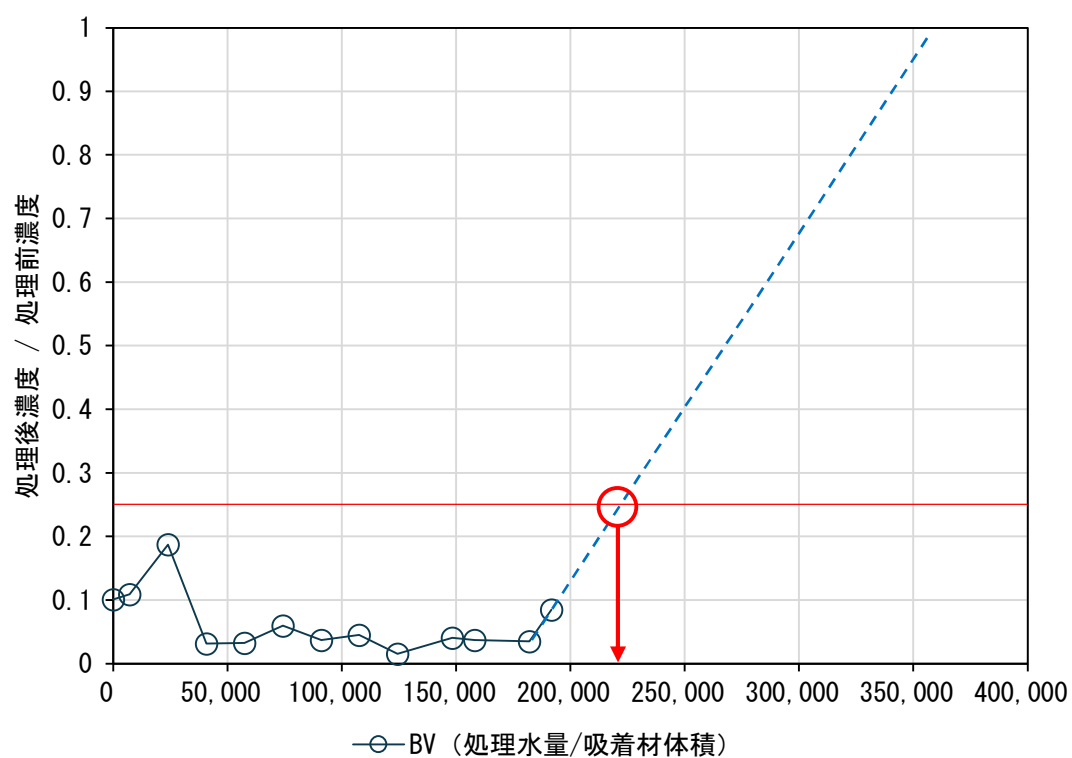


図 4－1 BV と PFOS+PFOA 処理後濃度/処理前濃度との関係

5. 撤去と復旧

試験装置は、2026年2月13日、3月9日に撤去した。また、撤去時に既設電源ユニットの開口部、汲み上げ配管の復旧作業を行った。

5.1 処理装置の撤去

2月13日に技術C、3月9日に技術A、Bの処理装置を撤去した。公園内の車両搬入時は誘導員を配置し、公園利用者と接触がないよう配慮した。無事故で撤去を完了した（図5－1）。



図5－1 撤去作業の様子および撤去後の状況

5.2 復旧作業

(ア) 既設電源ユニット

既設分電盤の開口部の復旧は、事業計画書のとおりを実施した。ゴムパッキンおよび鋼鉄板をボルトで固定することで復旧した（図5-2）。



図5-2 既設分電盤の開口部の復旧状況

(イ) 汲み上げ配管

既設の汲み上げ配管は、事前協議にて決めた方法で復旧した。切り込み箇所上部で切り落とし、塩ビ管を延長させた。また、アングルにより管を固定した（図5-3）。

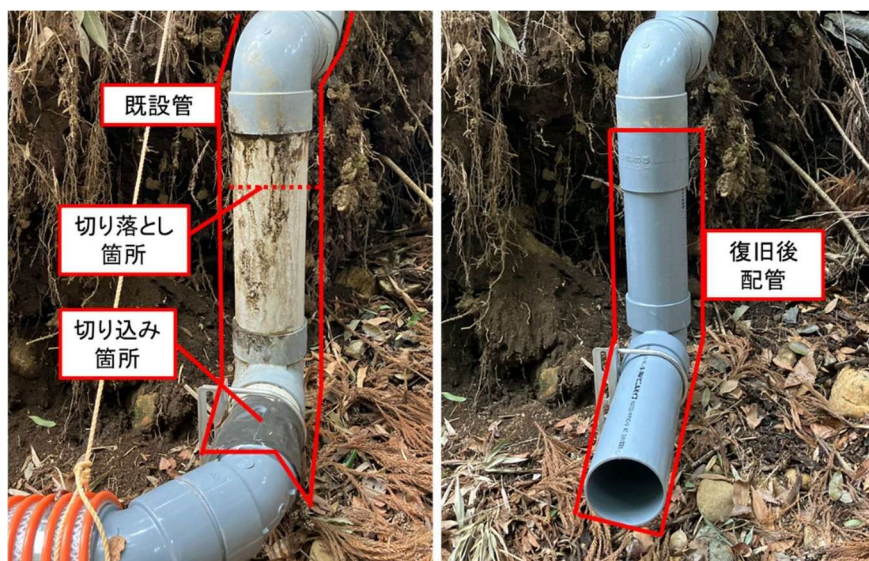


図5-3 汲み上げ配管の復旧状況

6. 本試験の成果

本試験の目的は「公共施設における取り組みを公表することによる市民の安心感の醸成」「環境対策の推進に向けた PFOS 等除去技術に関する知識の蓄積」「法令等の整備を見据えた知識の蓄積」であり、これらに関する下記の事項を本試験の成果として記す。

- 相模原市および奥村組がプレスリリースにより実証試験を公表（2025 年 8 月 19 日）
https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/033/593/0819/04.pdf
<https://www.okumuragumi.co.jp/newsrelease/2025/pfospfoa.html>
- 実証試験中の公園利用者および近隣住民からの苦情件数：0 件
- せせらぎの沢中（環境水中）の PFOS、PFOA の除去効果を確認した。
- 処理水の pH は処理前とほとんど変わらず、公園内の生物に影響を与えることなく浄化できる技術であることを確認した。
- 規制強化の可能性がある PFHxS や PFBS の短鎖 PFAS に対する除去効果を確認した。
- せせらぎの沢の水質であれば、3 ヶ月に 1 度程度のメンテナンス頻度で十分であることを確認した。

以上